

その他

沖繩戦四十五年目の再会

茨城県 内田常吉

(旧姓 白鳥)

タイムトンネル

平成二年八月七日、私は羽田発十六時、沖繩行き七四七に搭乗していた。

七四七機は雄大に広がる白雲の上を重厚なエンジン音を機内に響かせながら沖繩を目指し飛行中である。

二時間三十分後に、那覇空港に到着する予定である。

私の心は、少年のように興奮していた。

那覇空港には、四十五年振りに逢う可く沖繩戦当時

の防衛召集兵三名が私の到着を待っているのである。

四十五年の歳月の流れは、私も防衛召集の少年兵も確実に老人にした。しかし想い出は沖繩防衛戦に敗れて、北部国頭への脱出潜行を共にした若かりしころに戻り、四十五年のタイムトンネルの中にいた。

昭和二十年六月二十三日、沖繩守備軍は壊滅した。その後の約二カ月半、九月十三日まで、われ等四名の決死の脱出行、上官部下というより死生を共にした同志としての堅い団結と行動であった。

私も常々冥土へ行くまでに是非彼等に会いたい、会って心行くまで昔話を語りたいたと、念願していた。

その同志、上以洲和雄、新里正信、山入端武夫が那覇空港で、私を待っているのだ。

昭和二十年一月沖繩への米軍進攻は確定的となり、

守備軍は十七歳から四十五歳までの県民男子総てを防衛召集した。

上以洲と新里は、二月にわが第四中隊に、編入された少年兵である。陸軍二等兵の軍衣は着ているがまだ少年である。砲分隊勤務には無理であると、私の観測班に入った兵である。

中隊長殿は「白鳥軍曹面倒見ろよ」といわれた。私は陣中ではあるが、彼等を兵というより弟分のような心で接していた。

山入端は新里の学友で、山部隊に配属されていたが、喜屋武岬に辿りついた時には孤独の兵であった。死神を背にした四名を岬で運命の神が結び付けたのである。

ブラジル便り

されば四十五年振りの同志再会はいかにしてなったか。それは五月一日、私が明日からの田植作業の準備をしている時からである。

五月一日昼時、茨城県庁生活福祉部・県民生活課から電話が入った。

「内田さんは沖縄戦当時、白鳥軍曹といい迫撃砲第四中隊におられた方ですか」

「いかにもその通りです」

「実はブラジルから、上以洲和雄さんという人の、尋ね人依頼でございます」

「上以洲なら当時私の部下で、沖縄県人です」

「そうです間違いございません。ブラジルへ早速連絡致します」

と電話は終わった。

私は、しばし茫然とした。防衛召集の少年兵、上以洲がブラジルから私を尋ね搜しているという。夢のような話である。

沖縄戦―上以洲―ブラジル、何とか連絡しようと考えても、繋がらなかった。

とにかく、わが家の田植えは予定通り、五月二、三日の両日で終った。田植え後の多忙な十日余りが過ぎた。

十二日私が外出から帰ると、妻がブラジルの上以洲さんから電話が入り、「主人は外出中です」といいます。

すと、「では明朝八時に、電話を入れます」という約束ですよという。

翌十三日朝、私は上以洲からの電話を今か今かと心待していた。九時近くに電話が鳴る。

「上以洲でございます。お久し振りでございます」

「お互いに元気で何より」

から話し始め、電話では詳しいお話も出来ないから、お手紙を出します。で終った。

一週間程して、上以洲から封書が届いた。内容は、沖縄には米軍基地が多くあり、米ソが戦争になれば再び沖縄が戦場になる恐れが十分にあり、避難の目的で昭和三十三年に一家をあげて、ブラジルに移住したという。

来る八月二十三日―二十六日、宜野湾市に世界に雄飛している沖縄県人が集まり、各種大会を開催する。

それを目的に二度目の里帰りをすることになり、その際は非私に逢いたいと思ひ三月二十三日に、茨城県庁へ尋ね人依頼の書類を発送、五月十日に茨城県庁から回答の書類が届き、早速電話を入れました。という。

上以洲も確か六十四歳、老境となり、昔を偲び、懐しむ心が強くなったようだ。

なおブラジルへ疎開という決断は、いかにも上以洲らしい慎重な考えであり、行動である。

私は早速返書を送った。内容は、拙宅は成田空港に三十キロ程なり、空港へ迎えに行くから里帰りの際に拙宅へ二、三泊出来るように旅程を計画するように、と書き送った。

六月七日、突然、沖縄の新里正信から電話が入った。元気な声である。上以洲から私の健在と住所を知らされ、早速の電話だと言う。お互いに元気を喜び合う。山入端も元気だという。再会を約束して電話を終る。

新里の住所は、名護市伊差川である。

私が毎日心待ちしていた上以洲からの返事は、六月が終り七月になつても来ない。

七月二十六日夜、突然、ブラジルの上以洲から電話が入った。明後二十八日に沖縄へ帰ると言う。成田空港到着は、午後一時から二時の予定であり、成田からバスで羽田へ行き、沖縄行の便に搭乗すると言う。

私の返事は未着だという。とにかく二十八日、成田空港で逢いましょうと電話を終る。七月二十八日午後一時に、私は成田空港のウイングに着いた。サンパウロからの飛行便は予定より一時間早く十二時に到着したという表示である。到着して既に一時間が経過している。上以洲は羽田行のバスに乗るため、ウイングに出ていると思い捜し歩いた。

呼び出しアナウンスも三度頼んだが全く反応がない。二時三十分が過ぎた。

上以洲は団体行動として、既に羽田へ行ったものと、私は判断して空港を出た。

私が帰宅して間もなく上以洲から電話が入った。「成田空港で税関通過に三時間余り、ウイングに出たから、少時捜しましたが見当たらず今羽田へ到着しました」という。

残念、私は税関のことを簡単に考えていた。私は直ちに沖繩行を決意した。折から沖繩便は、夏休みのラッシュである。幸い八月七日羽田便と十日の沖繩便が入手出来た。早速、名護市の新里に連絡して冒頭の沖

繩行となったのである。

八月七日 晴

七四七便は、予定通り羽田から約二時間半の航程、十八時、那覇空港に着陸した。

出口は一階である。階段を降る私の目に先づ「歓迎、内田常吉様」と横書きした文字が飛び込んだ。次にその横書きした紙をガラス戸に当てて、手で押さえている初老の面々、「おお彼等だ」私は右手を挙げた。彼等も手を振り応えた。私は手荷物を受取り外に出る。握手、握手、皆んな元気である。新里が用意していたという車に乗った。

上以洲は白髪交じりの薄い頭髪で、いが栗頭という感じである。顔は、昔の面影を残している。妻と娘二人を連れて里帰り。具志川市の実姉の家を宿にしていると言う。

新里は房々として白髪で眼鏡をかけ、小柄な身体であるが、日焼した顔は、昔に変わらぬ精悍な相である。山入端は体格も良く、黒々とした頭髪で一番若く見える。昔に変わらぬ温和な相である。

彼等は、私のことを「内田さん」では気分が出ない
といって、「軍曹」「軍曹」と呼んだ。いづれも元氣、
祝福する。

車はこれが沖縄かと錯覚する程に発展し、ビルの建
ち並ぶ賑やかな車の多い街路を走り、具志川市に入っ
た。

具志川市赤道、春日観光ホテルに着いた。私の宿だ
という。上以洲が宿にしている姉の家から近いのでこ
のホテルに定めたという。

市街はすでに夕暮れの風景である。私のルームは五
一二号、早速シャワーを浴び旅の汗を流した。

ホテルの食堂で四十五年振り再会の、ささやかな祝
宴となる。四十五年の星霜、それぞれの人生図がある。

上以洲は昭和三十三年、ブラジルに移住、初めは農
業に従事したが失敗。辛酸苦闘の末にサンパウロ市で
呉服商となり、現在商売は長男に任せて、おれはゲー
トボールに精を出しているという。子供は男三人女六
人の九人、脱帽である。

新里は名護市伊差川で五、六人の工具を使う鉄工所

の経営者。作業の采配は長男に任せて、忙しい時だけ
手伝うという。子供は男三女二の五人、新里は良く飲
み良く笑うが、去る五月に妻を癌で亡くしたという。
彼はその淋しさを酒と笑いで紛らわしているかとも思
われた。

山入端は名護市東江^{あかりえ}で会社の役職にある堅実なサ
ラリーマンである。子供は男三女一^{あかりえ}の四人であるとい
う。

私が最も心配していた彼等の家族は、沖縄戦中に犠
牲になった者はいないという。何よりの幸せなり。戦
中の話、その後の話を肴にして飲むビール。話もつき
ないが夜も更ける。明朝九時に迎えにきますと別れる。
五一二号室、クーラーを強冷にしても暑かった。沖縄
は正に真夏である。

八月八日 晴

朝九時、彼等は約束通り迎えに来た。私の希望で、
我々のかつての戦場や脱出行路、潜伏した場所を判っ
ているところを案内してくれることになった。

まづ観測所障地のあった我^が如古^にへ行く。昭和二十年

四月五日、進攻してきた敵のM四戦車に初めて見参したところである。私は観測掛下士官として、この観測所で部下八名で任務に当たっていた。敵の攻撃は激しく四月八日夜、私は敵の手榴弾により負傷、棚原野戦病院に送られたのである。

今は宣野湾市の主要な市街地となり、商店や住宅が密集して建っている。わずかに残る小高い丘が当時の面影をかすかに見せてくれる。次に中隊の駐屯地末吉を訪ねる。

昭和十九年十月二十五日、那覇港に上陸した。迫撃砲四個中隊が分散駐屯していたところである。首里城跡の南下の方向である。我が第四中隊が駐屯していたあたり一面に雑木と雑草が密生し繁茂していた。

「ハブに注意」の立札が所々にあった。附近の住民に尋ねると、ここは那覇市の自然公園に指定されているので、やがて公園として開発されるということである。当時、中隊が炊事に使っていたカー（有水場）が、ほぼ昔の形で残っていた、今も附近の住民が大切に使用している様子であった。中隊が本部、各小隊ごとに丸

木で掘って建て茅葺屋根の兵舎を建てた場所も概略の見当がわかる程度であった。

中隊は軍命令により、五月二十八日夜、末吉を出て南部島尻に撤退した。激しく降る梅雨の中であった。末吉を出て那覇市で昼食。

次に摩文仁の丘を右に見ながら車は喜屋武岬に向かう。やがて道路は珊瑚礁を敷いたごつごつした農道になった。砂糖黍畑や雑木林の中の道を行き喜屋武岬に着いた。

昭和二十年六月下旬、守備軍残兵が茫然自失、烏合の衆となっていた。沖縄本島最南端である。幾多の悲劇の生まれたところでもある。その絶壁に立ち、私は四十五年前を回想する。私は左鎖骨折の負傷者なのだ、撤退時、中隊の戦列を離れ衛生班数名と共に末吉を出た。撤退の道々、敵の砲爆撃に衛生班も戦死者や負傷者も出て離散した。

私は一人戦場をさまよう流浪の兵であった。戦死者の食糧を頂きながら岬に辿りついた頃、私の負傷はほぼ回復していた。

梅雨も明けて連日快晴であるが、残兵の心は何んの希望もなく暗く重かった。敵は、我々残兵を遠巻に包圍していた。時々小銃声は聞こえるが攻撃しては来ない。一日中、マイクで降伏を呼びかけていた。岬の残兵は日毎に減っていた。

五月末から六月二十日頃までが最も悲惨な戦いであった。狭小な島尻へ後退した四万余の守備軍と数千の住民がひしめき合つて身を守る壕もなく、敵を迎え撃つ陣地もなく、急追撃する敵の砲爆撃に兵住民の差別なく殺された。無念の日々であった。

負傷しても野戦病院は開放してすでになく、重傷者は一人死を待つのみであった。混乱した戦場で、二十余日で四万近い将兵が戦死した。正に地獄であった。岬に辿りついた残兵も降伏以外に生命の保証はなかった。

沖縄最南端に追い詰められた残兵には、おおむね三つの選択事があった。降伏か、斬り込みか、北部国頭への脱出か。

私は降伏することは、日本軍人として至上の恥なり

と思つていた。故に降伏するつもりは、絶対になかった。

斬り込みの武器は、日本刀と手榴弾だけである。敵陣地は夜間も照明弾を打ち上げ、真昼の明るさである。手榴弾を投げ得る距離まで敵に接近できる確立は零である。たちまち発見され射殺される。何部隊の誰とも判ることなく、北部への脱出は、敵の警戒線を突破する決死行である。沖縄に上陸した米軍戦闘員は十五万余り。今は日本々土進攻に備えて各地に待機駐屯している。その重囲を突破するには百分の死を覚悟せねばならない。

しかし、奇跡もある。脱出に成功して国頭の残存部隊に合流し、ゲリラ戦に参加出来れば日本軍人として責務を果し得る。私は脱出を決意している。

偶然か神仏の引き合わせか岬で上以洲と新里に出会った。五月二十八日夜、末吉撤退時に別れてから約一カ月ぶりの出会である。新里は右腰部に、砲弾の破片が当り負傷していたが、幸い創は浅く元氣であった。混乱戦の中で中隊も離散、二人は助け合い、励し合い

ながら岬へ辿り着いたという。

新里の学友山入端も山部隊に編入されて、戦闘に参加していたが、混戦の中で孤独の兵となり、岬で出合い仲間になった。

彼等も降伏より脱出を希望した。喜屋武岬は吾等四名の決死の脱出行の出発点である。残兵を包囲している敵警戒線は陸上正面からは絶対突破出来ない。我々は干潮を利用して海へ降り、糸満方向へ脱出に決めた。

六月末の夜出発、絶壁の下の波打際、凸凹の激しい岩礁上、直進出来る場ではない。右に左に迂回しつづの厳しい行進であった。

三夜歩いてようやく一キロ位、荒崎辺りで陸に上った。岬を包囲している敵警戒線の背後に潜入することには、成功した。然し望見すると、敵の幕舎は村落のように各所に見える。我々は敵中にいることには、変りなかった。

次に脱出数日後に潜伏した糸満の陸軍野戦病院壕を尋ねた。現在は近代設備の養豚場であり、入口には人

も車も完全消毒する設備があり、立入禁止である。付近の人に尋ねると、壕内の遺骨は収集され、入口は塞がれ上に小さい祠が建ててあるという。

車は米軍が、上陸陽動作戦をやった湊川に出る。奥武島を一廻りして百名に出た。大里―西原―中城に到着する。我等の潜行路である。最後の潜伏地津覇に来た。

「潜伏していたのはあの辺りです」と彼等が指差す辺りはまだ雑然とした山林が残っていた。

私は感無量であった。ここで元日本兵の宣撫により、九月十三日、金武村屋嘉の捕虜収容所に入ったのである。

昭和二十年九月十三日はわれら四名の生涯忘れ得ない終戦日である。

車は太平洋の海岸通りを走る。夕刻、春日観光ホテルに着いた。ホテルの食堂で冷たいビールを呑み夕食を共にする。「明朝も九時に来ます」と言って別れる。

私はベットに横になったが、四十五年前の今ごろ、七、八、九月にわたる脱出潜行が、日中に見て歩いた

現場と重り合つて、頭脳は「タイムトンネル」に入り込んだ状態で眠れない。

荒崎で潜伏したアダン密生林を焼打攻撃されたこと、野戦病院内に残置された重傷者の死臭、白骨、月明と北極星を頼りに敵幕舎群の間隙を右に左に遅々として進むわれら四名の脱出者。常に敵と対峙している緊張感。何日頃、何んという土地を通つたか私は全く判らなかつた。かれらは流石に土地者である。脱出潜伏した場所等、多くを記憶していた。私の脱出行に関する四十五年の郷愁を充分に堪能させてくれた。

私は生来不信心な男であるが、今宵は必々と神仏に感謝した。約二カ月半にわたる敵中の脱出潜行がわれらの志と異なる捕虜という形で終幕した。しかし四名とも無事であつたことは、奇跡的とはいへ、神仏のご加護多大なりと思う。今にして思えば何よりの幸せである。

私はいかれらの長であり、かれらを守る責任者であつた。「軍曹は命の恩人だ」とかれらはいふ。しかし私は機敏で土地感のあるかれらの方がむしろ私の命の恩

人であると思つている。

八月九日 晴

北部国頭方面の観光となる。沖縄戦当時、国頭の本部半島に宇土部隊、千六百余名が守備していた。宇土部隊は四月十日から四日間の戦闘で全滅した。

われわれ脱出者の目標とした北部残存部隊は喜屋武岬の敗残兵の幻の希望であつた。その幻の部隊が現実存在するごとく、敗残兵間に伝わつた。いわゆるデマであつた。

九時に上以洲がホテルに來た。私と二人でホテル前から名護行のバスに乗る。バスは捕虜収容所のあつた屋敷を通つた。今は住宅が建ち並び昔日の面影はなかつた。

バスは一時間余りで、名護市内ターミナルに着いた。新里と上間君が待つていた。上間君は上以洲の学友で、本部町の実業家であるという。今日は上間君が北部を案内してくれるという。車の運転も上間君である。

東^{あがり}村の福地ダムを見物する。本島の生活用水がおむねまかなえるという。内地の大型規模のダムには

比べようもないが、昔はカー（涌水場）と雨水に頼っていたことを思えば、真に素晴らしい施設である。

車は東支那海に面した海岸道路に出て、北に向かっている。十数年前は牛車がやっと通れる程度の道だったという。現在は拡張工事により、素敵なドライブコースである。

一方は見応えのある男性的な東支那海、一方は山林が続く。小高い丘陵には蘇鉄が繁茂し南国の風景である。

所々に小さい集落があり、昔のままの民家も残っている。庭先に必ずパイヤの木が数本植えてある。昔に変らぬ懐かしい風景である。

車は沖縄本島最北端、辺戸岬へとに着く。「祖国復帰闘争碑」が建っている。辺戸岬は本島に沿って、東側を太平洋の潮が流れ、西側を東支那海の黒潮が流れて、岬で平行に交わる場所である。白いさざ波の線が沖へ直線に伸びている。珍しい眺めである。

しばらく見物して岬を後に車は南へ向かう。途中、茅打バンタを見物、午後三時名護市に帰った。名護動

植物園を見物、伊豆味バイン園に立ち寄り、沖縄名産の砂糖とパインを買い宅急便にして家へ送った。

名護で上間君と別れ新里の車に乗り替える。名護から高速道路に乗り、一時間足らずで、具志川市に入っている。市街は既に夜景である。途中上以洲一家が宿にしている高洲家に寄る。上以洲の奥さん、娘さんに初対面。同家で夕食をご馳走になる。雑談数刻、再び一同で春日観光ホテルに帰着、冷たい生ビールを呑み別れる。

昨日は沖縄の最南端に立ち、今日は最北端を極めた。同志のお陰で真に満足な沖縄の旅が出来た。

八月十日 晴

逢うは別れの始めなりは世の必定。十一時に同志が迎えに来た。ホテルを出る。十二時三十分、那覇空港に着く。食堂で昼食をしながら、次回の再会を語り合う。十三時三十分、搭乗準備。お互いに今後の無事を願い握手して別れる。十四時十五分羽田行九〇四便に搭乗した。

四十五年振りの同志の再会は終わった。

追記

昭和二十年九月十三日私は金武村屋嘉の捕虜収容所に収容された。

吾が第四中隊の将校は一名もいなかった。下士官は私の外四名、兵は七名、第四中隊の生存者は十二名である。

昭和十九年八月、群馬県沼田、東部第四十一部隊で編成された独立迫撃砲第四中隊は、総員百七十六名であった。

戦死場所の判明する者は三十名足らず。ほかの百三十名余りの戦友は、五月末から六月二十日頃までの、島尻における乱戦混戦の中で、人知れず散華されたのである。

沖縄南部島尻の悲惨な戦場、その地獄図、私の生涯忘れ得ない痛恨の想い出である。

戦没せる戦友のご冥福を祈り、平和の続くことを願いつつ生きている日々である。

応召うら話

京都府 秋田 守之

私は、昭和十六年九月二十日、臨時召集令状により、京都府伏見区深草中部第三十七部隊に応召。擲弾筒班の所屬でした。これが軍隊の飯を喰った初日で、どのような苦労が待ちうけているか、またどのような裏があるか、何の予備知識もないまま連隊区司令部の赤紙令状の命令通り消耗品の一員として入隊しました。

この日から年令に関係なく、あとからの入隊者がなければ召集解除の日まで初年兵として服務し、一日でも在隊日数の多い者が先輩となり幅を利かすという特異の社会に身を置きました。

入隊すると理由の如何を問わず命令は絶対服従の社会で、生命のある限りこの目的達成のためには毎晩のビンタは日毎に有効でした。従って同年兵が命令違反と思われる過ちをした時は、内務班が別でも同年兵の